

雲仙普賢岳火砕流現場と神戸の震災現場を経験して
FIWC関西委員会 青山哲也

◆はじめに～原発関連

今回の災害は地震とそれに伴う津波の被害だけではなく、原子力発電所の事故にも発展しました。放射性物質は目に見えないうえ、いったん被曝してしまうと健康被害は重大な問題になります。地震・津波の被災者への活動に従事することも大切ですが、ボランティア自らが被害者・被災者にならないために原発関連の被害が予想されるときは活動をやめる勇気も必要になると思います。

◆ワークキャンプとして活動する

災害被災地での活動には二通りがあります。ひとつは行政や現地の受け入れ団体に登録する個人ボランティアとして参加する方法。もうひとつは独自に組織的な活動をするボランティアです。個人ボランティアは現地がある程度落ち着いたら行政や関連団体から募集がかけられると思いますので、今回は独自の組織的な活動＝ワークキャンプ活動としてかかわるときのポイントを思いつくまに挙げてみます。

◆あなたが災害ボランティアに行こうと思うとき準備すること

- 学生の方は保護者の方にボランティアに行くことを伝えておく。
- 何かあったときの緊急連絡先を、後方支援の人に教えておく。
- 自分の名前、連絡先、血液型などを記入したものを身につけておく。
- 現地ではどのような状況でも活動できるように、必要な装備を持つ。
- 自然災害でも補償されるボランティア保険に入っておく。

【個人装備】雨具(登山用のカッパなど・傘では雨のときに屋外で活動できません)、防寒具、マフラー、手袋、マスク、冬用の寝袋、着替え、寝袋の下に敷くマット類、軍手、ナイロン手袋、作業靴(避難所ではなく被災現場で活動するときは、クギなどが落ちていたり、柱などに足を挟む可能性もあるので安全靴などを履いた方がよい)、ヘッドランプ(予備の電池も)、救急セット(個人の常備薬含む・原発事故の際に内服する安定ヨウ素剤は自治体が保管していて、指定された避難所などで医師の処方のもとにのみ服用します)、カイロ、トイレトペーパー、ヘルメット、ナイフ、ライター、地図、保温ができる水筒、携帯電話(ワンセグ付き)、健康保険証、洗面具、現金・カード(銀行・クレジット)など

※東北地方は現在でも氷点下になり雪や冷たい雨が降ります。雨や風に体が直接さらされると、気温以上に体感温度が下がり、体温を奪われます。人は体温を奪われると体調を崩し、判断力も鈍ります。「防雨・防風・防寒対策」は万全に準備してください。

※現地ではあまり個人的にもものを買うことはないと思いますが、開いている商店を見つけると普段食べている嗜好品が欲しくなったりします。息抜きにもなります。大金を持っていく必要はないですが、ある程度の現金は持っていくようにしましょう。被災地を少し離れるとオンラインの現金自動支払い機が使える場合もあります。防犯上は必要な額だけ出すようにしてもよいと思います。もし現金を紛失した場合でも他人を疑いたくないので個人で大金は持たない方がよいと思います。

【共同装備】発電機能のあるラジオ、テント、カセットコンロとガス、食器、スコップ、のこぎり、ツルハシなど、

◆個人の心構え

○災害直後に現場に入るときは、治安が確保されていない場合があります。自分の身は自分で守らねばなりません。現地で活動するときにはひとりで行動せず、必ず仲間と(最低でも2~3人で)行動すること。

○現地の人たちは家族、家、職場を失っている方々が多いです。そのような現地の人たちの心情を理解して、自らの言動、振る舞いに気をつけましょう。(神戸の避難所では、活動していたボランティアが被災者のいるところで楽しそうに卒業旅行に行くといつて反感をかったことがありました)

○現地では非日常の状況が続いていますが、ボランティアは被災者ではありません。現地で活動するにしたがって、被災者の方々と気持ちがつながるのは自然な心の動きですが、被災者を勝手に代弁するような言動は慎みましょう。(神戸では、被害の少なかつた被災者に向かって、ボランティアがもっと協力するように強要することがありました)

○災害直後の現場に入ったときは、亡くなった被災者の遺体を目にすることもありません。そういう光景を目にすると、忘れることはできません。今後の人生において、たびたび思い出すこととなります。そのことから心的外傷後ストレス症候群になる可能性もあります。その覚悟は持つておきましょう。

◆現地に入るとき

交通手段は限られます。自分たちで車・バイク・自転車を用意することも考えて下さい。また、当初は商店が閉まっていたり、商品がなかったりするので、当面必要な食料(調理の必要のないもの・お湯を入れるだけのもの)を持参しましょう。

被災地に入るときは通行可能・利用可能なルートについて可能な限りの情報を収集しましょう。被災地ではガソリンが不足しており入手困難な状況が考えられます。予備のガソリンも事前に調達しておく必要があります。ガソリンの購入には、ガソリン専用の金属製のタンクがいります。ポリタンクやペットボトルは法令で使えません。

◆リーダーの役割と活動期間

雲仙普賢岳の火砕流現場で活動したとき、私の滞在は1週間でした。このような期間では独自の活動はできず、現地のボランティアセンターに登録して活動することになりました。この反省から神戸ではとにかく「現地にいつづけること」を考えました。私が神戸で活動し、自分の目で見た被災地の現状を現地から発信することで、「青ちゃんがいるなら私も行こう」「ボランティアしたいなら青ちゃんを頼っていったらいいよ」「どうせなら友人のボランティアを手伝いたい」と多くのボランティアが集まり、支援の輪も広がりました。この経験から、リーダー、特に「いいだしっぺ」のボランティアにはできるだけ長期に滞在し、現地に自分たちが立てた「旗」を守ってもらいたいと思います。後方支援のグループには、リーダーの精神的なケアを特にお願いしたいです。一般のボランティアについては後ほど「現地での活動」でも触れますが、それぞれの生活を大きく犠牲にしない範囲で参加することが重要になると思います。一回の滞在が短くても、何度も参加するなど多様な参加形態をとることもできます。

◆どこで活動するのか

被災地が広範囲にわたっているときは、どこで活動するべきか決めにくいと思います。まずは家族や現地の知り合いの安否確認も大事な仕事になります。安否確認の中でつながりのできた地域で活動するというのがいいのではないかと思います。

◆活動のなかで信頼関係を

現地で活動するなかで被災者の方々に必要な活動をしようと思えば、彼らとのコミュニケーションの中で信頼関係を築いていくことが大切です。決して独善的な判断で行動しないで、被災者の方々の声に耳を傾け、同じ目線の高さを失わないようにしましょう。時には、現場の活動でボランティアが被災者の要望に応えられない場合や被災者の方々にボランティアの活動が理解してもらえない場合もあります。そのときでも信頼関係があれば、話し合いができますし、最終的にはお互いの立場を理解しあえます。神戸ではボランティアの拠点を避難所から近隣の教会に移すとき、避難所の自治会の方々から「私たちを見捨てるのか」という非難を受けました。しかし、避難所でもこれまで同様活動し、さらに避難所を出て生活を再建しようとしている人たちの活動も支援していきたいと根気強く説明し、再び協力しあえるようになりました。これも避難所の自治会の人たちとボランティアが個人的な信頼関係を築いていたからでした。

◆現地での活動

重機などを使った大がかりな活動は行政や自衛隊の作業になり、災害直後にボランティアができるのは避難所での活動が主なものになると思います。現地の責任者(自

治会・施設管理者・行政)と交渉し、引き受けられる仕事をしましょう。そのとき避難所にボランティアの寝場所を確保してもらえるときもありますが、テントや車で寝る準備もして下さい。避難所の活動は、水洗トイレ用の水の確保・救援物資や食料の整理と配布、避難所のそうじなどになると思います。また状況によっては、被災された方のお手伝いができる場合もあります。これは個人の住宅から大切なもの(アルバムや思い出の品など)を探す作業や半壊家屋などにブルーシートをかける作業などがあると思います。行政はこのような個人に対する活動はほとんどしてくれないか後回しになります。個人ボランティアだからこそできる活動だと思います。また神戸ではお風呂に入れない被災者の方々に足湯やマッサージをして緊張をほぐしてもらう活動もしていました。注意しなければならないのは行政や被災者の中には、ボランティアをただで働いてもらえる便利屋さんや勘違いする人もいることです。行政が本来金銭を支払って業者に発注すべき仕事をボランティアに依頼したり、被災者が個人の営利活動にボランティアに従事させたり、危険を伴う現場で無理に活動させることなどです。ボランティアはあくまでも自分の信条と方針に合う仕事を引き受ければいいのであって、どんな仕事を引き受け、あるいは引き受けないのかは、その都度、自主的に判断してください。ボランティアには自分の活動主旨に合わない依頼を断る自由があります。

◆現地での生活

ここであえて「生活」ということばを使いましたが、非日常の状況の中で活動するボランティアにとって自らが不安定な精神的状態にならないように、自分の中の日常性を保っていくことが重要になります。朝、起きたら“あいさつ”をし、顔を洗って、歯をみがくという日常のリズムを崩さないようにしましょう。このような習慣を維持することが、困難な状況でも精神的な安定を保つのに役立ちます。

食事については、本来なら持参した食料や現地で調達する食料で自らまかなう方がいいのですが、持参した食料が底をつき、商店での食料調達が困難な状況で、救援食料に余裕があって避難所の人たちから提供の申し出があった場合は、その援助食料をいただきましょう。その分、がんばって働けばいいことです。遠慮して体調を壊せばよけいに迷惑がかかります。

先に触れたリーダーは別として、一般のボランティアはそれぞれに自分の生活(学校や仕事や家族)を持っています。その条件の許す限り活動に参加します。これは大事なことです。被災者は災害に遭ったときからそれぞれ自分の生活を立て直すために生活環境・生活の質を上げようとします。ところが熱心なボランティアは特にそうですが、被災者に寄り添おう、被災者の立場に立とうとして、どんどん活動に没入し、自らの生活を維持できなくなる人がでてきます。こうなるとボランティアというよりは、「二次的な被災者」になってしまいます。このことから常々自分の生活のリズムと平常心を持ち続けることが大切になってきます。

◆キャンプ活動

現地では総リーダー、副リーダー、ワークリーダー、連絡リーダー、食料調達リーダー、会計リーダーなど状況に即した担当者を決めてグループごとに活動できるようにしたいです。これは普段のワークキャンプ活動で私たちが実践していることなので、分かりやすいと思います。総リーダーは連絡リーダーと協力し、現地の状況を後方支援グループに定期的に報告し、活動の状況を発信するようにしましょう。活動に必要な資金は会計が管理し、被災地では個人のボランティアが大金をもたないようにしましょう。災害地では日々刻々と状況が変わり、被災者がボランティアに求めるニーズも変化していきます。何が必要とされているのか、現場に立っているボランティアがそれぞれに感じたことを、その日のミーティングにフィードバックし、次の活動に結びつけていくことが大事になっていきます。必要な活動を思いついた人が、リーダーとなってコミッティーを作り、新たな活動を始める。その動きが次々に生まれていくのが災害地で活動するときには有効な動きだと思います。神戸でも現場の活動をしているキャンパーが被災者の要望をすくい上げ、様々なコミッティーを立ち上げ、きめ細かな活動ができました。

現地の状況にもよりますが、より自主的で自立的な活動をしようとした場合は、組織としての活動拠点を作る必要があります。神戸では当初避難所に拠点をもち、避難所の人々を対象とした活動をしていましたが、避難者が地域に戻って生活を始めるようになったとき、現地のキリスト教会の施設を借りて拠点としました。そうすることによって、避難所の人にも、地域に戻った被災者に対しても自らの裁量に基づいて活動ができるようになりました。また、炊事施設、寝場所、談話室(ボランティアだけでリラックスできる)を設けることによりボランティアの健康管理がしやすくなり、精神的な負担も少なくなりました。

◆後方支援

現地での活動とともに、後方で支援する活動も大切になります。ボランティアの募集、教育、資金の調達や現地の要望に基づく支援物資の調達などは後方支援グループが行います。現地で活動するボランティアは精神的にも肉体的も疲労し、なかには燃え尽き症候群でオーバーワークの状態になるメンバーもいます。そのようなボランティアが一時休息するための場所を提供するのも重要な役割になります。現地との連絡は定期的にとり、ボランティアの安全や健康状態などについて常に把握しておく必要があります。現地よりもマスコミなどを通じて現場の情報が集まる場合があるので、そのような情報を現地に伝達する役割もあります。

◆長期的な視点に立った活動の準備

これまで災害発生直後から数ヶ月の活動について書いてきました。神戸では1月17日の地震発生直後から4ヶ月間キャンパーが現場に常駐し活動しました。その後はベトナム人の人たちが避難生活を送っていた公園に週末ごとに通い仮設住宅を建設し、夏休みには障害者の作業所の再建・復旧工事や仮設住宅の整備・住民の交流事業を行い、冬休みには各地の仮設住宅を回って老人の方などに足湯をして回りました。状況によってはすぐに災害地に入れませんが、現在の状況からは長期的な活動の必要性も出てくると思われます。週末キャンプ・夏休みや冬休みのロングキャンプという活動の方法もあることを覚えておいてください。

また現地に出向いて活動すること以外にもできる支援があります。たとえば避難所において精神的に不安定になった子どもたちにレクリエーションを楽しんでもらう活動です。私たちが神戸では、避難所の子どもたちと動物園に行ったりしました。また、ある先輩キャンパーは京都のレクリエーション施設に神戸の子どもたちを呼び寄せ、一泊二日の楽しい思い出をプレゼントしていました。

そして、ゲリラ的な活動もあります。たとえばうどんやおでんの食材を現地に持参して、避難所の人たちに振る舞うという活動です。避難所の敷地内でやろうとすると施設管理者の許可が必要で難しい場合もありますが、避難所前の道路で振る舞えば可能になります。温かい食べ物を振る舞うととても喜ばれます。これなどはとにかく現地でとにかく活動したいが時間がなかったり十分準備ができないときにはいい方法ではないかと思います。

先日、関西でミーティングを行いました。あるキャンパーが、「あつてはならないことですが原発で大規模な事故が発生したときの避難民の受け入れも、今後の活動としては必要になってくるのではないか」という意見を言っていました。こういう意見もあるということで付け加えておきます。

持ち物

持ち物を紹介しておきます。

個人として

つなぎ

ヒートテック上下 3組

パンツ6枚

バスタオル1枚

ハンドタオル1枚

靴下4枚

ダウンジャケット

帽子

洗面道具

エンタメ道具

常備薬

携帯予備バッテリー

デジカメ

皮手袋

防臭剤

雨具上下

名札

腕時計

寝袋

銀マット

爪切り

バックパック

ヘルメット

食糧全日分

共有物資

テント

ガソリン携行缶

ガスコンロ

ガス

東日本大震災:被災者の心のケア 精神科医・中井久夫さんに聞く

東日本大震災でつらい思いをしている人々に、私たちはどのように接すればいいのか。また、何ができるのか。1995年の阪神大震災の際、被災者の心のケアに当たった精神科医の中井久夫さん(77)に話を聞いた。【手塚さや香】

◇無力さ感じずに、今は力蓄える時

かつてない地震と津波の被害に直面し、多くの人は被災した人たちにかける言葉を失っているかもしれない。「おかわいそうに」といった言い方は、言われた方はみじめに感じ、自尊心が損なわれる。自尊心は病気の治療においても災害時においても、絶対に必要で大事にしなくてはならないものだ。

「がんばれ」と言うのも、どうだろう。「がんばれ」は英語で「Do your best」と訳されたりするが、言われた方は「今もベストを尽くしているのに」と感じないだろうか。「幸運をお祈りします」といったニュアンスを感じる「Good Luck」という言葉が一番いいかもしれない。それをどのように自分の言葉にするか悩み、工夫して伝えようとするごとに意味があるし、その思いは伝わるだろう。大切なのは表面的な言葉の表現ではない。

大災害や大きな事件・事故に伴って起こる症状を表す医学用語「PTSD(心的外傷後ストレス障害)」を新聞やテレビでよく見聞きするが、わが国では16年前の阪神大震災を機に広く知られるようになった。不眠や悪夢を見るなどの症状が長い期間続く。阪神大震災の時は医療従事者もそのような症例を診察した経験がなく、被災者も自分たちの心の中で処理すべき問題だと思って、口に出すことを避けてきた部分もあるだろう。それゆえか、さまざまな心身症状の中で最も遅く症状が現れてきた。

PTSDは、被災者が「自分たちの存在が忘れられていく」と感じることで深い関係がある。阪神大震災時には、誰かがそばに「いてくれる」ことがいかにありがたいことかを、被災者となった私自身が再認識した。だから、被災者のそばに「いること」こそが最大の安心を与える、と折に触れて言ってきた。

自衛隊など特別な訓練を受けている人たちの忍耐力は別にして、自らも被災しながら救援に当たっている人やボランティアの場合、水だけで頑張れるのは1日、食べ物でも冷えたものだとせいぜい3日くらいだ。加えて、温かい食事をとれないでいると、新しい発想で物事に対処したり、臨機応変に対応することが、次第に困難になってくる。それが2週間もすると、毎日が同じことの繰り返しになり、体調を崩す人が増えてくるようになる。

阪神大震災の際も、このくらいの時期に風邪をひいて倒れる医師が多かった。しかし、当時はこの時期に九州の大学から救援が来てくれたことで、士気を立て直すことができた。その次は40～50日以内にやるべきことをやってしまうないと、人間のスタミナはそれ以上なかなか続かないものだ。

ボランティアで被災地に入る人たちは、たとえ大々的に活動する機会がなかったとしても、存在することに意味があるのだと思ってほしい。一方で、阪神大震災では土地勘のない神戸に地図も持たずにきたボランティアが大勢いて混乱した。被災状況を調査するための各種機関や報道陣も押し寄せる中で、地元住民が案内役を務めなくて

はならなくなり、救援や復興の妨げになった。

このたびの大震災は国民的な一致が得られるチャンスだと言ったら、不謹慎であろうか。しかし、精神科医による治療でも言えることなのだが、悲観的な予言は事態の悪化をもたらすことにしかならない。私たちは今、全国民が等しく被災者であるという認識に立ちながら、それでも少し楽観的になろう。被災者に対して何もできないのだ、と無力感を抱くことはない。日本が立ち直るには時間がかかる。今、自分は力を蓄える時だと考えよう。何度も言うが、私たちは被災者のことを忘れてはならない。歴史に終わりはない。今は試練の時だ。

転載:災害時性暴力被害

下記、災害時性暴力被害についての情報がまわってきましたので掲載します。青山さんの文章にもあった「現地で活動するときにはひとりで行動せず、必ず仲間と(最低でも2~3人で)行動すること。」を意識するといいと思います。要望書になっていますが情報として読んだらよいかと。茂木

以下転載

--

RC-NET(レイプクライシス・ネットワーク)というところが出している要望書です。拡散・賛同をもとめるものですが、情報としても読んでいただきたいです。(補足として、blog 記事「要望書についての質問へのお答え」も読んでもらえるとより理解しやすいと思います。↓

<http://blog.goo.ne.jp/rc-net/e/f04536b7262136dec86a47ad5f5d5cca>)

なぜこのことを広めたいのかというと、性暴力は問題として出しても、きちんと取り合ってもらえない、無視される現実があるからです。運動内部でもそれは変わりません。むしろ被害者が責められたり、さらに二重三重の被害を受ける結果になってしまったりもします。現実には、日常でも性暴力は起こっています。まずそのことを確認しておきたいのです。

また、この情報が流れるとき、加害者を特定の人や人種・国籍に限定しようとするかなり悪質な差別デマもありますが、そのような事実はありません。加害者は誰になるのか分かりません。現実にはあらゆる人種・年齢・性別のひとが、被害に遭う可能性があり、加害者にもなりえます。ただ、以下にも書いているように、より「弱者」だとみなされやすい人が被害に遭うことが多いのです。(逆に「強者」と思われがちな人が、被害を口に出せないということもあります。)被災地に行くことがあるかたは、最後の兵庫県こころのケアセンターの、

「サイコロジカル・ファーストエイド実施の手引き」が参考になるのではないかと思います。「こころのケア」にかんする手引きですが、この大震災・津波・原発など複合的な被害の状況ではかなりの人に必要になると思います。救援に行こうと思っている方にも、重要な情報だと思えます。

日本語

<http://blog.goo.ne.jp/rc-net/e/642eb94c8a0f6b3b9a81f3a218ea6b6a>

英語

<http://blog.goo.ne.jp/rc-net/e/2bb1712be91b4bd46ba4e272a7826428>

(緊急アピール) 災害時性暴力被害への対策を求めます

2011年3月11日、東北地方を中心に日本全土で非常に大きな地震が起こりました。

この地震により家屋などの倒壊や電気等ライフラインの損壊等等、多くの被害がみられ、被害の早急な収束と、二次的被害の縮小を心から祈ります。

レイプクライシス・ネットワークは、インターネット上での性暴力被害に関わる情報支援という活動をする私たち、一人の人間として何かが出来ないかということから、一つのアピール文を出すことにしました。

地震や洪水、津波などの自然災害が起こると、その混乱に乗じてレイプ・性暴力などの犯罪行為、性的弱者に対する暴力的な行為が増加する傾向にあります。

災害時には死角も増え、加害者が犯行に及びやすいこと、そして、男女混合の避難所やトイレ、着替え場所が無いことや、衛生を保つ為のライフラインが不足することなど、多くの面によって、全ての人にとってストレスフルな状況にさらされます。

その中でも、女性や子ども、老人、障がい者、他多くのマイノリティの方にとって、そのストレス状況は多大なものになります。

阪神大震災などでの教訓を受け、自然災害後の人災を出さないために、それらについての支援をより充実させることを願います。

政府等緊急支援に携わる各所に於いては、「生きて行く為の支援」をお願いしたいのです。その為の人材の投入及び予算を拡充し一人でも多くの被災者の方にとって少しでも支えを増せるような施策をお願いします。

具体的なアピールについては以下に記載します。

このアピールに賛同いただける方は rc-net@goo.jp までご連絡ください。随時賛同者と

して当記事上にあげさせていただきます。

また、文言の追加などについてもお知らせください。こちら、精査の上、随時更新させていただきます。

※賛同として記事に反映するのは「名前(ある場合は所属)」と居住都道府県ですが、賛同のお知らせをお送り頂く際には、署名としての精度をあげるため、氏名と住所をお書き添え下さい。

※rc-net@goo.jp までメールが送れないという問い合わせが数件。RC-NET の問い合わせフォーム (<http://rc-net.info/cgi-bin/mail.html>) から送ることもできます。

「災害時の性暴力被害対策の充実を求めます」

1、公式な災害時救援システムとして「性暴力被害者救援」を行ってください

災害時に性暴力が起きた場合、その事実を通常時よりも告げにくい状況になり、医療等の不足によりそのケアを受けることが著しく困難になります。

しかし、性暴力被害にあうということは、生命の危機にも直結するものであり、より早急な専門家の介入が必要になります。

これらを民間等に頼るのではなく、国や地方公共団体として公式に「性暴力救援システムの構築」を現地にて早急にさせていただくことを望みます。

被害にあったことを告げられる場所を作ること、そして二次的な被害を生まないためにより安全な場所への避難が出来る事、医療機関にかかれること、またこうした時だから蔑ろにされがちな「法的手段」への移行について把握をするための「性暴力専門の公的システム」が絶対に必要になります。

2、適切な情報提供を

災害に乗じて性暴力を始めとした犯罪が横行するという事は、多かれ少なかれ発生することです。まして性暴力はその犯行自体に隠蔽体質があるため、その案数は計り知れないものがあります。そうした被害があるということ、そしてそうした被害をさせない環境を作るためにも、適切な情報提供をしてください。

性暴力被害に関わる情報を集め、適切にアウトプットしてください。

被害者にとってよりアクセスのしやすい方法で行ってください。

3、トイレを増やす

水不足や設備不良等によりトイレの使用を制限されることや、男女混合の利用などによって、安心・安全にトイレを使用出来ないことは、大きなストレスに繋がり、それを原

困として水分をとらず体調不良になる方が多くいます。

また、無秩序に人が入る場所であることは、性暴力等の被害リスクを増します。

4、避難所等の外部であっても、野外は出来るだけ多くのライトなどで死角をなくす
地震等の影響で、災害後は非常に死角が多くなります。こんなところに必要ないだろうと思われるような場所であっても、こうこうとライトを照らすこと。人目につくと言う環境を作ることは、被害を出さないためにとっても大切なことです。

5、「生活出来る場所」を作る

着替えの場所、子どものおむつ替えや母乳をあげること、全て本来であれば人目につかない場所でやることですが、避難場所などではそれが出来なくなってしまいます。それ故に、人気の少ない場所にいたり、人の目に曝される場所でそれらをするのは、性暴力被害等のリスクを高めます。こうしたことは後回しにされがちですが、第一時的に、とても大切なことです。

6、一人親、独り住まいの老人などへの経済的支援

災害後、経済的に不安要素のある方々には住居などを含め、より多くの負担が強いられることとなります。また、非正規雇用などの方については、災害により直結して仕事を失うという状態にもなります。そうした方への援助策の充実はとても大切なことです。

7、避難所への誘導

一人親などで他の助けが得られない場合、また子どもが小さいから迷惑をかけるのではないかと、避難所へ行くことの無い方がいます。そうした方の避難所への誘導のためにも、避難所での生活面を向上させてください。

8、多様性の理解

LGBT 等セクシュアル・マイノリティーの方々にとって、当然のように男女のみに分けられた配置や断定は多大なストレスを生みます。また、そうした中で LGBT であることが本人の意思とは別に周囲に認知されてしまうことがあれば、悲しい現実ではありますがその視線が暴力的なものに転化することもあります。性暴力は男女の問題だけではなくありません。セクシュアルマイノリティーについて意識・スキル・知識のある専門家の導入は急務です。

9、予防教育の拡充

人間の行動というのは「被害がある」という現実を知らなければ、なかなか予防には

繋がりません。また、緊急時であるからといってこうした「声になりにくい犯罪」を放置することは決して許されざることです。適切な予防策を打つこと、またその周知によって性暴力を許さない「優しい」環境を作ることは今すぐ取り組むべき急務です。

10、見守り体制の強化

性暴力被害にあうリスクは老若男女全ての人があります。決して特別な人間のみの問題ではありません。そうしたことを理解した上でも、加害はより「弱者」と見なされる存在に向くことが多いです。特に子どもは、一瞬であれ親と離れてしまったら非常に無力な存在になります。子どもを一人にしないこと。地域のコミュニティーを最大限利用することは重要ですが、それに加え公的に子どもの見守り、保育などに別の場所をどんなに小さくてもいいから設けることや、子どもの居場所の確認などに尽力をお願いします。

＜災害時の PTSD 等心的外傷者への支援手引き

兵庫県こころのケアセンターが発行されている冊子「サイコロジカル・ファーストエイド実施の手引き」が、災害時にトラウマ経験をされた方への援助活動をするにあたって非常に役立ちます。

兵庫県こころのケアセンターさん、リンクの許可をいただきましてありがとうございます。

<http://www.j-hits.org/psychological/index.html>